

補章

少子化の国際比較

第1節 世界の人口と出生率の推移

(世界の人口)

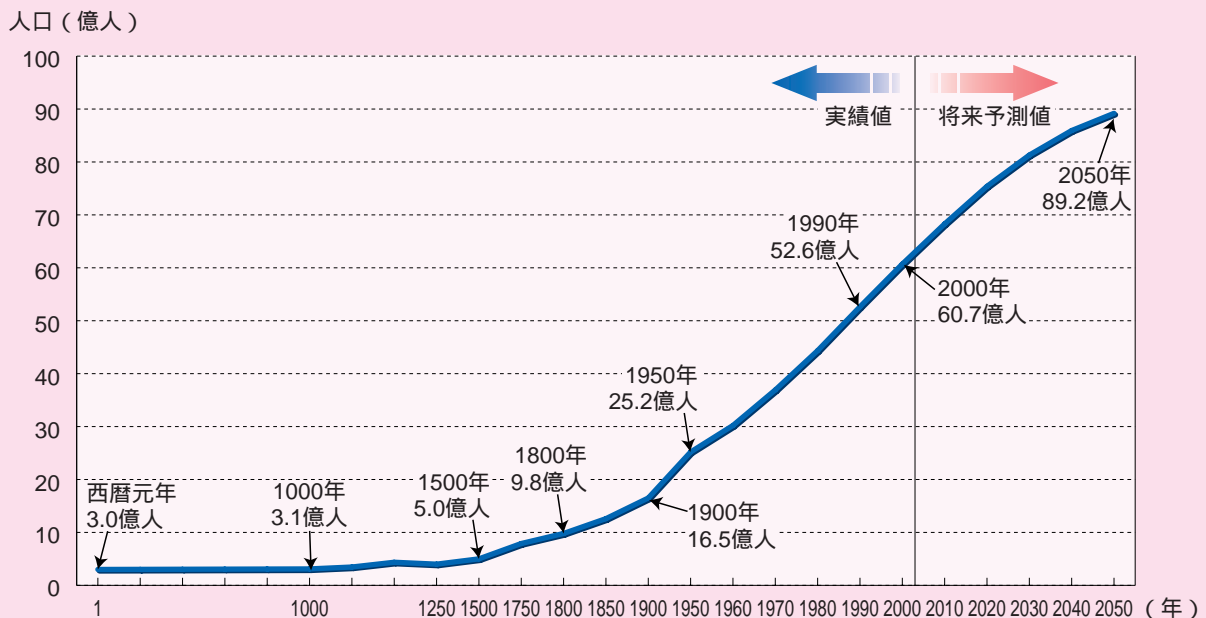
わが国における少子化の動向は、既に述べたとおりである。世界の国・地域の人口と出生率についてみるとどのような様相を呈するだろうか。ここでは、先進諸国だけではなく、アジア諸国を含めた形で、人口や出生率の状況についてみることにする。

国際連合が2002年に行った人口推計によると、世界の人口は1950年には約25億人であったが、その後人口は増加し続け、1960年には30億人、1975年には40億人、1990年に50億人、2000

年には60億人を超え、2003年には約63億人に達している。20世紀後半の50年間で、それまでの総人口を上回る約35億人も人口が増えたことになる。10億人増加に要する期間もだんだん短くなっている。

西暦元年には3億人、1000年では3億1,000万人、1500年では5億人、1800年では9億8,000万人、1900年には16億5,000万人と推計されていたことと比較をすれば、20世紀後半からの世界人口の伸びが、人類の歴史上いかに急激なものであったかが分かる。

第1-補-1図 世界の人口の動き



資料：1900年まではUnited Nations, "The World at Six Billion", 1950年以降はUnited Nations, "World Population Prospects 2002 Revision" による。

国連の人口推計によると、今後とも世界人口は増加を続け、2050年には、2003年よりも約26億人増加して、89億人に達する見通しである。そして、国連による別の推計では、世界の人口は2100年には91億人、2300年には90億人に達するものとされている。

(世界平均の合計特殊出生率)

20世紀後半の世界人口の増加率をみると、1950～55年平均では1.80%であったが、先進地域でのベビーブームと発展途上国での死亡率の低下を背景に、1965～70年平均で2.04%に上昇した。その後の人口増加率は低下し、2000～05年平均で1.22%となっている。ただし、1990年代以降0.3%以下の増加率となっている日本と比べれば、高い水準である。

世界全体の合計特殊出生率の動きをみると、1950～55年の平均で5.02の水準にあった。その後低下傾向に入り、1975～80年平均で3.90と4を下回り、1995～2000年には2.83と3を下回った。2000～05年平均(2000年までのデータを元に算出した推計値)は2.69とわが国でいう人口置き換え水準(2.08)を上回っているものの、過去50年間で最も低い水準となっている。その結果、15歳未満の年少人口の割合は、1950年には34.3%であったが、1965年の37.6%まで上昇するが、その後は低下し、2003年には29.0%と3割を下回っている。

第1-補-2図 世界の人口増加率と合計特殊出生率

